

先ごろ、私たちの研究グループの岸本寛史先生によるClinical studies in Neuro-Psychoanalysis (Karen & Mark Solms, Other Press, 2001)の邦訳『神経精神分析入門』(青土社2022年)が刊行されました。今回のワークショップはこれを記念して、神経精神分析研究の原点に立ち返り、失語症の臨床をテーマに開催いたします。

フロイトは『失語論』(1891)において、ウエルニッケ失語を聴覚性中枢の障害と考えた場合、なぜ錯語が生じるのか説明できないという問題を指摘しています。この謎に対するフロイトの仮説は、自発的な発語は常に語の音像Wortklangbildを経由して生じるというものでした。

フロイトの立場は非局在論とされ、より機能的な障害—例えば、健常者でも疲れると錯語に近い言い間違いをする—へとその後の関心の対象を変化させたといった「神経心理学から精神分析へ」という整理が一般になされます。実際、言語中枢なるものを想定せずとも、すべての失語は連合の離断によって生じるとフロイトは述べてます。

古典的な聴覚性中枢の臨床的意義を巡る論争は、その後'double disconnection' (Mesulam et al. 2015) などを経て離断説優位に傾いたかに見えましたが、近年可能になった損傷例での神経連絡の詳細な検討(Matchin et al. 2022)や、健常者でのfMRI研究の知見(Giordano et al. 2023, Caucheteux et al. 2023)に基づいて、聴覚性中枢としての上側頭回STGの役割が再検討されるべきかもしれません。

しかしここでは、語産出に聴覚性の想起像の関与を想定する以上、フロイト的な別種の局在論が問題となるのではないか、という理論的問題に注目したいと思います。彼は言葉は無意識的な思考を意識的なものにすると考えていました(Freud 1915)。そのプロセスは大脳皮質における局在というより、心的装置のトポロジーにおいてのみ考えられることかもしれません。

脳内の計算過程がどのように意識化されるのかという観点から考えると、神経細胞レベルの情報(大規模言語モデルに例えるなら、ある語に対応する点座標)が、意識化可能な語に最初に変換される「場」を想定せざるを得なくなります。脳の中の意識されない言語処理過程UCsをひとつの機械と見なして、その故障としての失語症を考える場合、聴覚性言語表象はUCsから意識的過程Csへの出力結果であると同時に(出力結果がUCsにフィードされることを考えれば)、脳という機械のCsに対する制御系でもあるのではないのでしょうか？

「でも今は、たくさん話すことができません。このホテルhotelの人々に対しても同じです...ああ、聞いてください。...病院hospitalと言いたかったんです。
...ええ、すべてが消えてしまいます。ええ、最初に、すべてが消えてしまいますeverything goes」

このように語る、『神経精神分析入門』で紹介されるウエルニッケ失語の症例は、言語障害と意識変容の関係、さらには精神病性体験との類似性について、さまざまな示唆を私たちに与えてくれるように思われます。実際同書は臨床的に興味深い症例記載に富んでおり、またルリアを神経精神分析の源流として再発見する点で神経心理学史的にも興味深い内容となっています。当日は様々な観点から自由な雰囲気での議論がなされることを願っています。

久保田泰考